

南方

使役に耐えた俘虜生活

岐阜県 二村 清

勅旨で知り、悲愴な思いで拳を目頭にあて、憤慨し号泣したあの一時の惨めさが、いまだ脳裏から消え去ることはない五十年前の囚われの身の過去を靡げながら拾い、まとめてみた。

第十二期普通科練習生として横須賀久里浜海軍工作学校卒業、内地勤務を経てのある日、乗艦命令により海兵団に滞在、一週間余りで集結完了し、翌早朝門司沖に出航、護船団を伴い一路南下した。

台湾海峡を通過しマニラ沖に一船団を残し、南シナ

海に入るや爆撃に襲われ、我が艦艇の援護に当たった。初めての出会いに全員が驚きの体験をした。しばらくして、分隊士から巡洋艦後尾損傷により配置変更するの知らせがあつた。そのころ、ボルネオ沖を航行中、再び馬來第三一海軍航空隊に配属になつた旨の伝達を受け、二時間ほど経過した後、シンガポール沖に停泊、接岸上陸し、待機していた輸送トラックで到着した所がセレーター飛行場の宿舎だつた。

分隊士のこれからの作業情況、また戦況報告を受け、兵舎に所持品の整理を終え、直ちに作業に掛かつた。一日の作業を終え、夕暮れの夜空に煌めく南十字星、南の国の情緒に肌身がジーンと幻想と感激に包まれ、目を閉じると走馬灯のごとく浮かぶ。辺りは平和な一孤島そのものである。

六カ月余り過ぎたある日、突如本隊の移動命令が出た。移動した所はゴム林の中で、大変な作業だった。それを二日掛かりで終えることができたが、場所の関係で非常に不自由な生活の毎日だった。数カ月後、特攻機の出陣でまさに隊員の勇猛果敢な覚悟、その偉勳を偲び哀悼の意を表したい。

八月半ばの午前、突然分隊長の集合合図に隊員が口を揃えて何事かあるぞと、良からぬ噂を口々に騒がしくなった。部隊長の発声が半ば震え声で響いて聞こえたと同時に、あまりにも突如のことで悲惨な終戦勅書だった。

一瞬隊員は憤慨と興奮で我を忘れ騒然となり、半信半疑の状況だった。と同時にまるで打合せをしたように凄まじい爆音と共に飛来したジェット機。一度も見ただことのない飛行機が何回となく飛来し、ビラを撒き散らして行く。ただ茫然と眺め、何たることと哀れな光景を嘆き、直感的に先々までを案じた。

そうした一時が去ると早速、各分隊の武装解除と荒々しい発声音。所持品を纏め移動態勢に入る。しば

らくして分隊長から今後の行動の細かい説明があり、一時間ほどの後、ジュロン港に向け行進した。

ようやく湾口に到着。辺りは物々しい警戒に監視兵が自動小銃を向けて並び、四カ所ほどの検問所で慌ただしく検問を行っている。その側に大きく炎が燃え上がっている。検問が順次終わり順番がきた。荷物を台の上に広げた。すると手当たり次第、側の火の中に投げ込んでいく。何たることをするんだ、ほとんど荷物がなかったが一枚の毛布と写真が返された。その途端腕の時計を取り上げられた。本当に残念無念で悔しさと憤慨した。

検問が終わり、船内はこの出来事に騒然とし、騒がしく過ぎた。三時間余りがたち船は出航した。マラッカ海峡を北西に数時間過ぎたころ、錨が下ろされ、上陸の号令があった。みんな軽くなった荷物を持ち上陸し、目的地に向かって行進した。ようやく辿り着いた所は、バットバハのゴム林の立ち並ぶ広い場所だった。ここで我々が白活するよういわれた場所だ。全員到着した。各分隊の居住地割を終え、早速幕舎造りに掛か

り、椰子の葉を屋根に敷く。大わらわで作業が進んだが、作業が終わったのが夜半で、発電機一基を司令部に、他はローソクだった。

いつまで暮らすのか当てはない。野菜作りに畑を耕そう。作業分担で開耕する者と植え付けする者と、収穫を楽しみに毎日ひもじい生活が続いた。

それから十日余りしたある日、またもや英印司令部から指令がきた。それはビンタン島への要請だった。

約三十名ほどが先発隊として出発、無二の戦友もこれに同行したが、その後音信不通となった。それから二日後、指令の出たのがシンガポール内の復旧作業である。各作業隊員が決まり、司令からの訓示を受け、残留隊員に見送られ待機する。

作業隊はローリーに詰め込まれ南下した。二時間余り走ったところ、広場に停車し降ろされた。通訳の案内で十人ずつ中へ入って官職氏名を名乗るよう指示を受け、順次検閲を受けた。中に並ぶと将校と現地要人の子供たちが見つめる中で、戦犯ならぬ顔見実験だった。部隊には異常なく全員が終わり、再びローリーに乗せ

られ、走り出して二時間余りで到着し降ろされた所はジョホールバルで、ここで再度検閲だったが、ここは形式だけですんだ。

また、車上の人となり、二時間ほど走って今度はチャンギーの小高い山の中腹に降ろされた。ここには既に数知れぬキャンプシートが山と積まれていた。各班ごとに居住域が決まる。早く幕舎を造って隊員は休養をとらねばならない。明日から復旧作業に支障を来たすばかりか病人を出しては部隊全体に影響しかねない。ようやく出来上がった時は夜半の零時近く、当直を残して休息に着いたが、三時過ぎ起床し雑炊とカンパンで朝食を取り、点呼を取り出発した。

目的地へは徒歩で二時間余り、七時半ころまでに待機することになっている。現場から監視員二人と現地人が我々の前へきて作業の指示をした。監視兵の急ぎ立てる中で仕事は重労働だ。銃口で小突いたり、言葉が荒々しく厳しい作業で、なかなか止めさせようとなない。

足元の暗さを見てようやく終わりを告げた。「オー

ケー、フィニツシユ、ゴユーキャンブ」何しろ毎日休憩もなくぶつ通しの作業のため、疲労と寝不足でキャンプに帰ればただ横になり寝たい。もちろん空腹もあるが疲れがひどい。みんな本当に音を上げてきた。だれも代わりがいるわけじゃない。齒を食い縛つて我慢し、耐え忍んでやつてきた。

二、三カ月経過した時点で体力の限界すら感じ、作業現場にも半ば虐待行為的な面もあるとして通訳を通して改善を要求して来たためか、追い迫い扱ひも丁重になつてきたようだった。中でも一番嫌われた作業は、三人ほどだが一般住宅の汚物のバケツでの回収であった。この汚物をアンモニア工場へ運ぶ仕事に悪臭がひどく、後部に乗っているためバナナの皮や石を投げつける者などがいて、感情的な問題など起き、みんな嫌つた。

またキャンプから程近い所にチャンギー刑務所があり、この中の掃除をさせられ、広場の除草に何日も通つたが、これがまた汚物はもちろんのこと鉄索磨きまでやらされた。キャンプに帰ると早速行水で体を洗つ

てから食事を取り、すぐ床に入るのが日課だった。しかしその後待遇は非常に良くなり、だんだん送迎までするようになり、隊員も飛び上がつて喜び、活気を取り戻してきた。みんなの表情も明るくなり、助け合い励ましあつた。

一年余りは早く去つたが、そのころは内地へ帰還の噂で持ち切りだった。実際に事実なら、キャンプ内は大変な騒ぎとなり、ついに実現することとなつた。待ち望んだ内地帰還命令がでる。特別要員を残し帰国準備の号令に沸き立つた。

立つ鳥跡を濁さず、各班ともにシートを畳み、周囲の清掃を慌ただしく行ひ、全員異国に眠る御霊に黙禱し、故国に合掌をして名残を惜しみつつキャンプを後にした。

昭和二十二年九月、故国へ。